時空夢想記

蒼紫なつめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
時空夢想記

【Ｎコード】
Ｎ０１６３Ｚ

【作者名】
蒼紫なつめ

【あらすじ】

それは、大切なものを護るための戦い。
譲れない大切なもの。
それを護るためなら、どんな事でもしてみせる。
たとえ、この手が罪に穢れようと……。
たとえ、どんなに犠牲を払っても……。
綺麗事だけじゃ、世の中やっていけない。

護りたい人がいる。失いたくない人がいる。
何にも代えられない大切な人がいる。
罪に穢れようと、愚かと言われようと、立ち止まれない。
罪に汚れた手が掴むのは、光（希望）か、それとも闇（絶望）か……。
物語の結末を決めるのは、神でも運命でもなく、少女次第――。

※この小説は魔法のiらんど様で連載していた同作品を転載したものになります。

プロローグ

ぱたぱたと待ちきれないように時計を見ながら、動き回る少女が一人。

時計を見ては、目の前にある玄関の扉を見つめる。

少女――朔原千姫（さくはら せんき）は、それを何度も繰り返しながら、玄関の周りを歩き回る。

肩より少しだけ上の艶のある綺麗な黒髪に後ろはピンクのリボンがついている。

可愛らしい大きな紫苑の瞳は、今は不満を表していた。

千姫が時計を見て、玄関の扉を見る動きを何回も繰り返した時、玄関の扉が開いた。

それと、同時に先程までの不満そうな顔から一気に明るくなり、扉を開けた人物に飛び付いた。

「おかえり！　賢兄！」

千姫は、満面の笑顔で飛び付いた人物を見上げる。

賢兄と呼ばれた人の芯の強そうな綺麗な黒髪に眼鏡の向こうに見える優しさが窺える黒い瞳が、少しだけびっくりしたように呆けながら千姫を見つめる。が、すぐに不敵な笑顔を浮かべた。

「なんや～？　しばらく、お兄ちゃんに会えへんかったから寂しかったん？」

少しだけおかしい関西弁で喋るこの人は、朔原賢（さくはらけん）。

千姫の兄で良く当たると最近有名になってきた占い師。

賢の占いの師匠は、とても有名な占い師でテレビや新聞などでも

取り上げられまくっている。
その師匠の元に占いを本格的に学ぶために賢は、長い間大阪に行っていて、今日久々に千姫達の家に戻ってきたのだ。

「あら、お帰りなさい。賢」
「あ、お母さん」
「母さん。ただいまー」

玄関の騒がしい様子に気付いたのか、千姫の母がリビングから出てきた。
賢が片手を挙げて、ヘラッと微笑むと母は、クスッと笑った。

「はいはい。お帰りなさい。賢が帰ってくるまで、千姫ってば、ずっと玄関の周りをうろちょろしてたのよ」
「なっ！？　お、お母さん！　それは言わない約束だよ！」
「あらあら、そうだったかしら？　ごめんなさいね。母さんも年かしら」

おほほと片手で口元を隠して、笑う母に対して、千姫は膨れた面で母を半眼で睨む。それに対して、母は涼しい顔。
そんな様子を見て、賢は懐かしそうに笑う。

「自分ら、相変わらずやな～。全然変わっとらんやんか」
「賢兄こそ全然かわってないでしょ！　それより、そのエセ関西弁はどうしたの？」
「エセ言うなや。しゃーないやろ。あそこに居るとうつるんや」

賢は、少しだけ何かを思い出すようにふっと優しげな笑顔を浮かべる。

「まあ、賢の口調はともかく、今日はご馳走にしましょうね」
「本当！？　やったーっ！」
「それでね、迅君も呼んできてあげて。私は、準備しなくちゃいけないから」
「はーい」

母は、それだけ言うとそそくさと台所に行ってしまう。
千姫も靴を履いて、外に出ようとすれば賢も後ろからついてきた。

「あれ？　賢兄も来るの？」
「おう！　俺も久々に迅に会いたいんや。会うのは久々やからな。大っきくなってるんやろうな」

そう言って少しだけ懐かしそうにしながら笑った。
迅とは、千姫の家の隣に住んでいる千姫と同い年の男の子の事だ。所謂、幼なじみ。
家が隣なだけ直ぐにつく。千姫が玄関でチャイムを鳴らすとしばらくしてから、扉の向こうから気だるそうな声が聞こえた。

「どちら様？」
「あ、迅！　私だよ」
「……人違いです」
「ちょっと！　明らかに迅でしょ！　めんどくさいからって、それはないわよ！　出てきなさーい！」

千姫がそう扉に向かって怒鳴れば、扉の向こうで、ハァと思いきりため息をつくのが聞こえた。
中から出てきたのは、当たり前だが千姫の幼なじみの玖裟南迅。
薄い茶色の髪が無造作にはねていて、気だるそうに細められた薄茶の瞳が千姫とその横にいた賢を捉えた。

賢は迅を見ると、ニヤリと言う言葉が似合う顔で笑った。

「よう！　久し振りやな！　どや、最近は？」
「賢兄。帰ってきたんだ。てか、何その関西弁」
「なんでお前ら皆、そこに食いつくねん！　ええやろ、別に」

少しだけ拗ねたように、ぷいと視線を逸らす賢に対して、迅はめんどくさそうにため息をついた。

「……で、何の用？」
「そんなん決まっとるやろ！　大っきくなった迅を見にきたんや！　ほんまに成長したなー」
「まあ、二年も経てばね」

にこにこと笑顔の賢に対して、迅もほんの少しだけ嬉しそうな顔をしていた。
小さい頃から、忙しい迅の両親は迅をよく千姫達の家に預けていた。
そのせいか、賢も迅を本当の弟のように大切にしていて、迅も表情には出さないが賢を兄のように慕っていた。

「あ、迅。千姫とは俺が居ない間、何も無かったやろな？」

にっこりと笑っている賢の笑顔が黒いのは、きっと気のせいじゃない筈。
そう、賢は迅の事を本当の弟のように大切にしているけど、やはり千姫は別格らしく、二人の交際を認めようとはしないのだ。
可愛らしい容姿で人気者の千姫に彼氏がいたことがないのは、賢のせいなんだろうなと迅は賢に見つめられながらそんな事を考えた。
しかし、迅より先に賢の言葉に反応したのは千姫だった。

「な、何言ってんの賢兄！　私と迅に何かあるわけないでしょ！　ただの幼なじみなんだから」

千姫の言いきった言葉に賢は満足そうだが、ある意味可哀想と迅に同情の視線を向ける。

迅は、呆れたように額に手を添えた。そして、千姫に彼氏が出来ないのは賢だけじゃなく、こいつの鈍感さも大問題だなと思い直したのだった。

人の事には敏感だけど、自分の事には鈍感すぎる千姫。

どんなに好意を見せても、さらりと受け流すこの娘をどうしろと？

迅は、更に呆れたため息をついた。

「あんまりため息ばっかつくと幸せが逃げるよ？」

「うるさいな。もう用は終わったんだろ？　家に帰れよ。俺はもう寝る」

「駄目！　まだ用は終わってないの！　今日は、賢兄の帰りの祝いとして、お母さんがご馳走をつくるから、迅も食べに来るの。どうせ、家にいたってカップ麺とかしか食べないんだから」

強く迅を睨みながら、そう言い放ち、迅の腕を掴み無理矢理引き摺りだす。

それに迅は抗おうともがくが、やがて諦めたように千姫にされるがまま連れていかれた。

迅の両親は、今も忙しく海外を飛び回っているので、迅は一人暮らし状態だが、めんどくさがりやの迅は放っておくとご飯も食べないので、千姫がご飯を作ったりしてあげているのだ。

やはり、隣なので直ぐに家につく。

千姫は迅の腕を掴んだ状態で、扉を開けるとそのまま靴を脱ぎ、リビングへ向かう。

「お母さん。迅連れてきたよ」
「あら、迅君いらっしゃい。あと、ちょっとで出来るからもうちょっと待っててね」
「あ、お構い無く」

そう返事をすると、迅はすぐ側にあったソファーに座った。千姫も迅の隣に座ると、賢は千姫達の前のソファーに座った。
そこからは、他愛のない話ばかりをしていた。
大阪の事。占いの事。学校の事。変わった事など。
別に特に変わった話じゃないけど、凄く楽しかった。
しばらくすると、千姫の父親も帰ってきた。

「おっ、迅君じゃないか。久し振りだね」
「お久し振りです」
「って、ちょい待ち！　父さん、なぜに俺をしかとすんねん！　可愛い息子が帰ってきたんよ！？」

和やかに迅に笑いかける父に対して、賢は自分を指差しながら父に話しかける。父は、その言葉にふっと視線を賢に移す。そして、何か懐かしそうに瞳を細めて……。

「おお、お前は……」
「父さんっ！」
「どちら様でしたっけ？」

いきなり真面目な顔でのその言葉に賢は、漫画のようにずっこけた。

「賢兄。見てるこっちが恥ずかしい」

「……ふっ」

千姫は、少しだけ顔を赤らめ、迅は笑いを堪えていたけど堪えきれずに吹き出した。しかし、そんな事は気にせずに賢は父親を見つめる。とても悲しそうな顔で……。

それに堪えきれなかった父親は、盛大に笑いだした。

「……あはははは。冗談だよ。冗談。……お帰り、賢」

「……父さん。うん。ただいま」

父親を少しだけ恨めしそうに見るが、父親の優しい笑顔に賢の表情も緩む。そんな時、やっと料理が出来た。

その後は、皆で料理を囲んで大騒ぎ。

幸せな家族。幼なじみ。仲の良い友達。勉強は嫌いだけど学校だって楽しい。

そんな夢のように幸せの日々に満たされて、千姫の日常は続いていく。

そう、これ以上は何も望んでいなかった。これからもこんな幸せが続くと信じていた――。

料理も食べ終わり、迅も自分の家に帰り、母は洗い物をして、千姫はお風呂に入っていた。

お風呂から上がり、部屋に戻る途中に賢と出会った。賢の表情には、いつもの朗らかさがなく、とても真剣な眼差しで千姫を見つめていた。

「賢兄。どうしたの？」

「……お前、近いうちにとてつもなく大きな運命に呑み込まれる。そんな嫌な予感がする」

「え？」

真面目で関西弁すら使っていない賢の真剣さに何故か背筋に寒気が走る。
そのせいか、賢には千姫が落ち込んでるように見えたのか、いつもの優しい笑顔に戻り、千姫の頭を撫でた。
「ま、気にすんなや。俺の気のせいかもしれへんしな。明日学校やろ？　もう寝なや。……おやすみ」
「うん。……おやすみ」
賢の優しい笑顔に、乱れた心が鎮まっていく。そして、賢に笑ってから部屋に戻り、それから倒れ込むようにベッドに潜った。
ベッドに入ると、一気に眠気が襲ってきて、そのまま意識を闇の中に引っ張られた。

＊＊＊

赤い、赤い。燃えていく。大切なものが……。
殺されていく。大切な人達が……。
力がないものは泣くことしかできない。自分の非力さに泣くことしかできない。
……力が欲しい。

＊＊＊

「……ゆ……め？」
目を開ければ、見慣れた天井。間違いなく自分の部屋。

千姫は、上半身だけ起こして、辺りを見渡してから、小さく息をついた。
詳しくは覚えてないけど、なんだか嫌な夢だった気がする。
胸の奥がもやもやするが、気にしていてもしょうがない。

「よし！」

小さく呟いて気合いを入れる。
時計に目をやれば、時刻は七時丁度。
勢いよくベッドから飛び出して身支度を整える。
リビングで用意されている朝食を食べていると眠そうに大きなあくびをしながら賢がやってきた。

「おはよう、賢兄」
「おはようさん。朝から元気やな」
「元気が私の取り柄だからね。さてと、じゃあ、もう行くね」

勢いよく椅子から立ち上がり、隣の椅子に置いてあった鞄を取り、扉を開けようとした途端――。

「千姫っ！」

賢の叫び声と共に腕を強く掴まれた。千姫は、賢の突然の行動に驚いたように振り返った。

「びっ……くりしたー。どうしたの？」
「……え、あ……。悪い。気にすんなや。……ほら、はよ行かんと遅刻するやろ」
「賢兄が引き留めたくせに……まあ、いいや。行ってきます」
「気いつけていけや！」

賢の言葉に見送られながら千姫は、大きく頷いてから家を出ていった。千姫の出ていった後を賢は妙に真剣な顔で見つめていた。
千姫が家を一歩出た途端、急にドクンっと心臓が大きく跳ねた。急激に頭に痛みが走る。胸が苦しい。

「……な、に……？」

突然の痛みに誰が答える訳もないのに問いかける。
……私を……呼んでる……？
突然の痛みがまるで自分を呼んでるように感じて、千姫はおぼつかない足取りで痛みが導く方へと歩きだす。
迅の家の前を通り過ぎようとした時、丁度迅が家から出てきた。

「あれ？　千姫。いつもはしつこいぐらい迎えにくるくせに今日は、素通り？」

迅が若干皮肉めいた口調で千姫に呼び掛けるが千姫は、聞こえていないのか迅を無視してそのまま歩きだす。
それに迅は不思議そうに千姫を見るが、千姫は迅を見ようともせずに学校とは反対方向の道に進む。
千姫の瞳には何も映さず、まるで操られて、千姫の感情がないように感じられる。

「ちょっ、千姫。どこに行くんだ？　そっちは学校と反対方向だぞ」

再び迅が慌てたように呼び掛けるが、千姫はそれすらも無視して歩き続ける。
迅はめんどくさそうにため息をついてから、千姫の後をついていく。千姫は無言のまま、道から外れて草むらの道を進む。

迅が何度も呼び掛けるが、千姫は無言で足早に歩き続ける。迅はいい加減に限界なのか呆れた口調で千姫に怒鳴ると同時に、突然草むらだらけの視界が開けた。

「千姫！　いい加減にしろよ」

強い口調で言い放てば、今まで何を言っても無言だった千姫の肩を掴んだ瞬間、びくんと跳び跳ねた。そして、瞳に光が――千姫の感情が戻った。千姫は、突然の事に迅を驚いた様に見つめた。

「びっ……くりしたー。なんだ、迅か。驚かせないでよね」

千姫は、胸を押さえて、ふぅと安堵の息をつく。そして、何かに気づいたように辺りを見渡した。

「……ここ……どこ？」

「俺が知るか。千姫がここまで来たんだろう？」

「……私が？」

信じられないとでも言うように考え込む千姫に迅は、めんどくさそうに頭をかいた。

「ここは、神社？」

「それにしては、小さ過ぎだろ？　多分あそこにあるのが祠だろうけど……」

かったるそうに迅が指差す先には、確かに小さいが祠みたいのがある。

なんだか胸が騒ぐ。

……呼んでいる？

「そんな事より、学校遅刻するぞ」

迅がそんな風に言っても千姫の視線は、祠から外れない。真っ直ぐ祠を見つめて……。

「なんだかあの祠、凄く気にならない？」

「……俺は、なんだか嫌な感じがする」

「そう、かな？　近付いてみよっか」

「おいっ！」

迅が静止の声を掛けるにも関わらず、千姫は導かれるように祠へと近付く。迅も仕方なく千姫に続いて、祠に近付く。その時――。

「あかん！　その祠に近付くな！」

「え？」

聞きなれた声に振り返るのと同時に急に祠から眩し過ぎるほどの光が発せられた。

振り返った千姫の視線の先には賢が……。

どうしてこんな所にいるのだろうか？

そんな事を考える前に光に体が包まれていく。

「な、なな、何！？　何が起こってるの！？」

『……見つけた。――おいで、あなた――国へ……。運命を変える――少女よ』

「誰！？」

突然、聞こえた声に辺りを見渡すが人の姿はない。所々、途切れて何を言っているのか分からない。

光に包まれる視界の中、迅も光に包まれていたのが見えた。

『……人々の愚かな戦いに終止符を……。手を汚す事を迷うな。道を迷えば大切なものは全て無くなる』

意識が段々と奪われていく。それでも、姿なき声は直接頭に響いてく。

『……期待している。尊き――戦――の――少女よ』

大事な所が聞こえないせいで意味が分からなかったけど、その声を最後に意識が途切れた。

意識が途切れる少し前に賢兄の叫び声が聞こえた気がした。

光が消え去った後、祠に残ったのは呆然とした様子の賢だけで、千姫達の姿は見当たらなかった。

「……千姫……迅……」

賢の言葉は、誰もいない虚空を虚しく響き渡った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0163z/

時空夢想記

2011年11月30日21時46分発行